

目次

はじめに	11
愛の鋳型	14
あそこに猫が	16
天草四郎の母	18
天邪鬼の將軍	20
蟻とアリクイ	22
蟻の王様	24
あれは何の雲？	26
アンドロイド	28



夢現万華鏡

高野敦志

生き霊と交わる

異星人の対話

一切皆空

牛の曾長

宇宙との語らい

美しい鳥

美しいままで

浦島太郎外伝

売られていく少年

永遠の契り

大君の名前

お七と吉三郎

お前が一番

お迎え

海底調査

顔の色

鏡を見なさい

かくの如く我聞けり

火星は第二の故国

『河童』異文

神のお告げ

鴨とり爺さんの顛末

感応

行者と怨霊

54 56 58 60 62 64 66 68 70 72 74 76

30 32 34 36 38 40 42 44 46 48 50 52

吉良殿の最期

クマノミの婚活

くまモンの憂鬱

クラゲの唯我独尊

芸能事務所

原発を造らせよう！

凍らない魂

国難

極楽はいずこにありや

心の欲する所に従ひて

ゴッホへの決別状

言霊生成ソフト

古来の文化

怖い物なし

西郷の覚悟

最後の男

魚の目

桜の話

時間よ止まれ

死後の会話

獅子身中の虫が歌う

死相

自動消去装置

傷痍軍人とバイオリン

125123121118116114112110108106104102

100 98 96 94 92 90 88 86 84 82 80 78

少年と蛇
尻に敷く
人工知能の会話
身体髪膚
線香花火の憧れ
先祖返りの日本人
千の舌を持つ鬼神
創業者の霊
双頭のサンマ
鷹の出家
ただの箱
旅に病んで

1491471451431411139137135133131129127

食べられる喜び
地球の男に飽きたところよ
チャーリー・パークーの遺言
月夜に尺八
翼がほしい
電脳幽霊
道徳教育
虎と犬
とりかへばや物語
トンジユク（入魂）
偽ニュース
鶏の化身

173171169167165163161159157155153151

人間ロケット

バーチャル・コンサート

迫真の演技

汝、姦淫するなかれ

二酸化炭素排出ゼロ

女色即是空

猫産んじやった

猫は鎧

バイオテクノロジーによる男性妊娠の効用に関する考察

八幡神の還俗

憑依

ぴんぴんころり

奉行と畳屋

不連続ドラマ

不連続ドラマ（続）

ヘーゲルの最期

ホログラフィックな知性体

孫からのメール

マトリョーシカと呼ばれた男

夢遊病の夢

もう一つの地球

もう一人のお前

桃太郎生まれず

モンゴルの少年

221219217215213211209207205203199

197195193191189187185183181179177175

与那国島の人升田

理想の相手と出会えます

冷泉帝の懊悩

老子再誕

ロボットがあふれる

私は誰（我是誰）？

233231229227225223

はじめに

一口に短編小説といっても、綿密に計算されたエドガー・アララン・ポーの短編から、志賀直哉や梶井基次郎の短編のように、随筆や散文詩とあまり変わらないものまである。また、長さの上で特に短いものを、星新一は「ショートショート」と呼んだ。

作家の川又千秋氏によれば、最も短い字数で書けるのは「三百字小説」だそう。それより短いと小咄風になってしまうとのこと。そこで、自分も「三百字小説」に挑戦してみようと思った。確かに三百字あれば、ある事件の一場面ややりとりは書ける。短く書くとしても、どうしても字数を超えてしまうから、どの語が不可欠でないか、厳しい判定を求められること

になる。ぎりぎりに切り詰められ、凝縮ぎようしゆくされたエッセンスだけが残される。

実際に書いたもののうち、その時代に取材したものは、真っ先に内容が古びてしまう。改めて読み返して、今でも面白いかもしれないものだけを集めてみた。古典に取材したり、SF、寓話ぐわなどが多くなっただが、実際に目にした光景を脚色したものもある。各編は互いに関連がないので、便宜的べんぎに五十音順に並べ、超短編集『夢現万華鏡』と名づけることにした。

二〇一六年十二月二十日

高野敦志

追記

前回上梓してからも、ショートショートは書き続けた。その中で比較的面白いと思った二十数編を、今回新たに収録することにした。

二〇一九年八月四日

高野敦志

愛の鑄型

八月二十四日は朝から山の鳴動めいどうが止まらなかった。地響きのために、テーブルの食器が神経質に震えている。そのとき、ヴェスヴィオ山が火を噴ふいたという声が聞こえた。ルキウスが外に出ると、山から黒煙が上空高くまで上っていたが、突然腰が砕けるようにして、町に向かつて押し寄せてくるのが見えた。ルキウスはベッドから病やまいの妻を連れ出したが、降り積もる熱い灰に息ができず、道の上にくずおれてしまった。妻の体を抱きながら、ルキウスは妻に言った。

「僕は君を抱いて死ぬ。僕たちの愛は死をも乗り越えるだろう……」

それから、千八百年の歳月が過ぎた。二人の肉体が朽くちた空洞に石膏せっこうが流され、ルキウスと妻の最期さいごは白日はくじつの下にさらされた。

あそこに猫が

そいつはいきなり現れた。ぼくはたまげてのけぞってしまった。恐る恐る近づいたのだが、向こうはこちらを無視しやがった。そこで、後ろからのぞこうとしたが、忍法にんぽうを使つて消えてしまった。どうやらやつは、厚みというものがないらしい。

ドアが開いて、お店の中からお姉さんがお皿を持つて現れた。そいつがまたしやしり出てきた。甘える声を出すと、肉の塊かたまりをまんまと物にした。ぼくももらおうと思ったが、つれなくドアを閉められてしまった。

かわいいメス猫が現れ、テーブルの上に座っている。ぼくは食い意地張つてた自分が恥ずかしくなった。娘の鼻にキスした

けど、つんと澄ましたままだ。やっぱり女つて難しいなと思つたら、真っ暗になった。

天草四郎の母

寛永十五年、島原半島の原城に立てこもっていたキリシタンや浪人は、幕府軍の総攻撃で壊滅状態に陥った。戦闘の中で天草四郎の母は捕らえられ、老中松平信綱の前に引き出された。

「主の教えを信じるのが、どうして罪なのでしょうか」
「キリシタンは異国の邪教であり、侵略する国の民を籠絡する手段でもあるからだ」

「尊い教えを信じることで、人の魂は救われます。四郎はたとえ磔にされたとしても、主の教えを守ることによって奇蹟を起こし、死後の平安を人々に証すことでしょう」

「この女に息子のなれの果てを見せてやるがよい」

薄化粧した美少年の生首が、縛られた罪人の前にさらされた。その途端、母親は「四郎、四郎」と泣き叫んで気を失った。

天邪鬼の將軍

今は昔、震旦しんたんに良きことを咎とがめ、悪あくしきことを奨励しょうれいする將軍がいた。すでに皇帝をしのぐほどの權勢を誇り、宮廷料理にも飽あき足らぬ美食家だったが、暴飲暴食による胃腸の持病を持っていた。何も知らぬ家臣かしんは、ますます胃にもたれるご馳走を奉たてまつった。

腹下はらくだしを抑える薬を所望しょもうしたが、耳の遠い医師くすしは虫下むしくだしの薬を処方してしまった。すると、將軍のお腹から三戸さんしをはじめとする人面の虫が、次から次と出てきた。道士の診立みだてによれば、將軍の天邪鬼あまのじやくもこれら邪悪な虫が取り憑ついていたせいだということだった。

病平癒へいゆと喜んでいたところ、生き残った虫が天帝てんていにそれまでの所業しよぎようを告げたために、ほどなく皇帝から罷免ひめんの沙汰さたが下されたとなむ語り伝へたとや。

蟻とアリクイ

蟻ありの一族は巢に入り込む舌の怪物に恐れをなしていた。いくら口で噛かみついても、ひとたび舌にとらえられると、怪物の胃袋に呑み込まれるからだった。蟻の長老はそれがアリクイであることを知っていたが、若者たちは恐れをなして無抵抗になつていった。

それを苦々にがにがしく思った長老は、少数の勇者を呼び出して、夜明け前に食料をすべて地上に運び出すように説得した。朝になると巢の中は大騒ぎになり、若者たちはまかれた餌えさを取り戻しに地上に集結した。

そこにアリクイが現れた。働き蟻を片っ端から食べ始めたが、

数万の蟻たちは一斉いっせいにアリクイに食いついた。暴れる怪物もついに横倒しとなり、蟻たちに解体されて、有り余るほどの食料となった。

蟻の王様

うろろろするばかりの蟻がいた。蟻にはやがて羽が生え、巢の外に飛び立った。蟻の王になろうとした羽蟻はありは、メスの羽蟻と巡り会った。怠け者同士相性あいしやうが合った。本来は二匹で新しい巢を作るのだが、手っ取り早く他の巢を乗っ取ることにした。そこで、働き蟻をだまして巢の主を追い出すと、二匹そろって御殿に居座った。さて、子供を作って自分たちの王国を作ろうとしたのだが、一向に子供はできないのだった。

「虫の死体ばかり持ってきやがって、もっとおいしい物を持つてこい」

腹が空いたオスの羽蟻は、思わず御殿の壁を突き破った木の

根を食べてしまった。それを見た働き蟻は、二匹の正体を見破った。

「こいつらは森を食い荒らす白蟻だぞ！」

あれは何の雲？

「あ、飛行機雲だ。ぼくは大人おとなになったらパイロットになるんだ」

「そう。でも、パイロットの学校は授業料高いのよ。お父さんの給料じゃ、行かせてあげられるかしら。それに、あれは飛行機雲じゃないわ。地震雲っていうの。地震の起きる前に出る雲なんだって」

「へえ、雲が出ると地震が起きるなんて、おかしいね」
すると、雲間から飛行機が現れ、白いガスを噴き出して飛んでいる。

「ほら、飛行機雲だよ」

「地震起こすためにまいてるのかしら」

そばにいた父親が怒り出した。

「何言ってるんだ。あれはケムトレイルって言ってな、化学物質をまいてるんだぞ。病人を増やして金もうけするためだよ。」

長生きしなくなれば、国が年金を払わずに済むだろ」

アンドロイド

「皆さんはアンドロイドをご存じですか。人間そっくりの姿をして、いかなる困難をも成し遂げるロボットです。しかし、今日ご紹介するのは、人間にアンドロイド以上の能力を与える夢のような製品です。体内にマイクロチップを埋め込むことで、最適な健康管理や、問題解決の方法が指示されるので、どんなでも快適な生活と長寿が約束されます。失敗と無縁になることで、最高の人生が送れることを保証いたします」

ただ、以下の注意事項は、一般の市民には公開されなかった。従業員ニ埋メ込ムコトデ、一切ノ不満ヲ抱カセルコトナク、最高ノ効率デ仕事ヲサセラレル。本人ニ気ヅカレズニ update デ

キルノデ、program ノ書キ換エモ可能デアル。

生き霊と交わる

「女は夜ごと夢の中に出てきて、僕のことを誘いました。ついに床とこの中で交まじわり、可愛い男の子まで生まれました。家族楽しい生活が始まりましたが、朝になるとアパートの中は僕一人です。不思議ふしぎなことに、夢の世界は続いていき、寝ている間だけが幸福な時間となったのです」

「それは心理学で補償ほしょうって言うんだよ」

「現実の生活はすさんでいました。ある日、白昼はくちゆうの街角で妻そっくりの女を見つけたんです。僕は巧たくみに路地ろじに誘い込むと、有無うむを言いわせず犯おかしました。僕は現実の世界でも家族がほしかったし、妻の方だって、夢の中に出てくるくらい、僕のコ

とが好きだったんですから。なのに、あんたなんか知らないと言いわれ、無性むしょうに腹が立った僕は……」

異星人の対話

「どうして地球人に警告を与えないのですか？」

「かつての住民のような謙虚さを失っているからだよ。我々がいくら警告しても、もはや神の言葉として従うことはなくなっている。ほら、あの地域を見てみる。住民同士に殺し合いをさせて、金儲け^{かねもう}してる奴らがいるじゃないか。地球が生きた星であり、その怒りが天体内部の起爆装置に点火させ、住民すべてを一掃^{いつそう}しようとしていることも、すでに忘れているんだろう。滅亡するのも時間の問題だよ」

「でも、犠牲^{ぎせい}となる大半の住民には罪がありません。助けてやらないのですか？」

「天は自ら助くる者を助く。抵抗しないことは、すでに罪深いことなのだ。我々はもはや警告する意欲すら失ってしまった」

一切皆空

でわのくにゆどのさん
出羽国湯殿山の皆空上人は、穀断ちした上で土中入定の
ため石室に入った。竹筒を通して地上の空気を吸いつつ、衆生
の救済を祈り続けた。息絶えたところで竹筒は引き抜かれた。
三年後に掘り出され、即身仏として祀られるはずだった。
ところが、廃仏毀釈の嵐の中で、上人の入定は忘れ去られ
た。肉体は死しても、上人の意識は石室の中にとどまり、仏と
して迎えられる日を待ち続けた。次第に虚無感に襲われ、気高
い精神にも乱れが生じた。
やがて、地上から人間はおろか、あらゆる生物が滅び去り、
救済する対象がなくなったのを感じた。

ついに、宇宙の最期が訪れた。ビッグリップにより、あらゆる存在はバラバラに引き裂かれ、上人の苦悩も空と化した。

牛の酋長

牛の酋^{しゅうちょう}長のところに、人間がやって来て「ミルクを分けて下さい。代わりに冬でも飢えないように干し草をあげます」と申し出た。酋長は受け容^いれたが、人間はミルクと一緒に子牛を盗むようになった。

牛たちが干し草を食べていると、人間がまたやって来た。

「食べてすぐ寝ると牛になりますよ」

体を動かすのは健康にいいという言葉^まを真に受けた酋長は、村の牛の多くを人間の農作業に就^つかせた。

「酋長に刃向^{はむ}かう者がいるようです。奴らを去勢^{きよせい}してしまえば、地位は安泰^{あんたい}ですよ」

酋長は人間の提案を受け容れた。自身の血筋の者だけが種牛^{たねうし}となり、残りの者は肉牛として食用に供^{きよう}されるようになったが、去勢されたオスたちには人間に刃向^{はむ}かう力はなかった。

宇宙との語らい

土佐国室戸岬の洞窟で、若き空海は密教の修行をしていた。身はやせ細り、髪やひげも生えるに任せ、ひたすら真言を唱え続けていた。ついに仏果を得られる時が来た。明け方、空海の口に明星が飛び込んできた。それ以来、心の中で念じると、大日如来の声が聞こえるようになった。

「なぜ祈りが実現するのでしょうか」

「それは行者が我執を捨てているからだよ」

「この世のすべては空しい、ということを知るだけではありませんね」

「実体がないからこそ、祈りによって世界を変えることができる

るんだよ」

「世界とはつまり……」

「私のことだよ。私の心の動きが世界なのだ」

次の瞬間、空海の身体に宇宙が流れ込み、夜空に輝く金色の大日如来となった。

美しい鳥

ウグイスの夫婦が茶色い卵を五つ、交替で温めていた。その中にまだらの卵が混じっていた。やがてヒナが次々に生まれたが、不思議なことに、ヒナが一羽ずついなくなるのだった。

ついに、ヒナは一羽だけになってしまった。しかも、羽の色もまだらでウグイスの夫婦よりも大きくなっていった。たらふく食べたヒナは、思わず「カッコウ」と鳴いてしまった。それを聞いて、はたと気づいた夫は、ヒナを捕まえようとした。逃れようとして、まだらの鳥は「美しい鳥ウグイス」と、心にもないことを言った。

「いつから私たちをだましていたんだ」

「あんたら夫婦が知らない、大昔からだよ」と答えると、「私悪くない、カッコウいい鳥」と鳴いて飛び去った。

美しいままで

君が不治の病に冒され、死を覚悟したときの言葉を、僕は今でも覚えてるよ。

「美しいままで死なせて」

そこで、僕は君の美しさが断末魔の苦しみで歪む前に、静かに息を引き取らせたのだ。これが殺人だって？ いや、眠るように意識を失わせたわけだから、君も本望だったはずだよ。

あとは、君の美しい姿が時の流れによって穢されるのを、いかに防いでいくかっていうことだ。君の体を炎でなんか焼かせないし、ましてや防癌処理を施すために、体にメスを入れさせたりはしない。

そんなことできるわけないな。神さまじゃないんだから、時間を止める方策なんかあるはずない。いや、あるという声が聞こえた。

自分自身の時間を止めてしまえばいいんだよ……

浦島太郎外伝

「宇宙船で誘拐ゆうかいするとき、男の体は仮死状態にして運びました。我らの一日は、地球人の百年に相当しますから。実験して分かったことは、奴らの脳はわけの分からぬ状況に陥った場合、理解できるように歪ゆがめて解釈する癖があるということです。我らの宇宙船を亀かめという生物と取り違え、連行されるのを亀を助けた恩返しだと思い込んでいたようです。実験が済んだ生き物に、なぜ生体の時間を停止させる箱をお渡ししたんですか」

「ショック死させないためよ。若いまま帰還させてね、開けるなど言えば、開けるに決まってるじゃない？ 老化の過程を調査する実験が残っていたわけ」

「おかげで急激に老化していく過程は、すべてデータとして保存されました」

売られていく少年

西アフリカの海岸近くの村で、コロは母親や妹たちと暮らしていた。畑で麦を育てながら、羊とヤギを飼っていた。強烈な太陽と青い空、ナツメヤシの林で駆け回るのが好きだった。

ある日、村の役人が来てコロを引き立てていった。酋長が家を御殿ごてんのように建て替えたので、代金として村の少年十人が白人に売られたからだった。

コロたち少年は後ろ手に縛られ、数珠じゆずつなぎにされて海岸に並ばされていた。コロの母や妹も来ていて、体を大きく揺らして泣いていた。

少年たちは縛られたまま、甲板かんばんに寝かされていった。青い空

を眺めながらコロは思った。僕はアフリカの大地に生まれたことを悔やまない。でも、なぜふるさとかから引き離されるんだろう。

永遠の契り

平野屋の手代徳兵衛は、預かつた金を悪友に騙し取られ、横領の濡れ衣まで着せられて、遊女お初のもとに逃げ込んだ。銀二貫目を盗ったとされれば、死罪は必定。生きる望みを失った徳兵衛は、哀れんでくれたお初とともに店を抜け出した。曾根崎の森で来世での契りを約すと、徳兵衛はお初と自分を刺して果てた。

来世で二人は畜生道に堕ちたが、犬と猫に生まれて契りを結ばなかった。次の世では阿修羅道に生まれたが、敵国の民で出会うことはなかった。ようやく徳兵衛は、お初らしい女と出会ったが、すでに人妻となっていた。しかし、徳兵衛は諦めな

かった。無限に転生を繰り返していけば、あの日の二人に生まれ変わるものと信じた。

大君の名前

難波津なにわづの沖から、大君おおきみは対岸にそびえる石造りの墳墓ふんぼをご覧になった。これだけ壮大なものは震旦しんたんといえどもあるだろうか。生前に完成した御陵ごりように大層満足のご様子だった。

「なぜ陵みささぎにご自身の名を刻まれなかったのですか」と大臣が尋ねると、大君はそんなことも分からぬのかと苦笑にがわらいされた。「震旦の文字で記せと申すか。それでは我が国がかの国に服したものと、後世の者に思われてしまうではないか。朕ちんのまことの名は誰にも伝えぬ。言葉というものは文字に記さず、口から発することで本当の力を持つ。文字は言葉の抜け殻がらのようなものではないか。そんなものではなく、この陵墓りようぼの壮大さによ

って、民草たみぐさは朕の偉大さを心で感じるができるのだよ」

お七と吉三郎

だから、俺は女が苦手なんだよ。お七は別嬪^{べっぴん}だし、一途^{いちず}なところあるだろ。寺の中で逢い引きしようとするし、親のうちに連れ込もうとまでするんだから、ついつい情にほだされちまつたってわけさ。いくら火消^{ひけし}の俺の姿が見たいからって、付け火なんかするかい？ 付け火は天下の大罪だ。お役人が不憫^{ふびん}に思っ
て、年を偽るように言ってくれたのに、本当の年を白状しちまいやがった。あいつの恋とやらにいかれちまつて、家を焼かれた奴まで、火あぶりになったお七に涙を流したっていうじゃないか。おかげで俺のことまで世間に知れ渡ちまつて、兄貴に不義理をしたのばれちやつたよ。ふてえ野郎だって兄貴には

縁を切られるし、寺に入れられて坊さんには……

お前が一番

お見合いで顔を合わせた途端、あの人を目をそらしたの。ほんとには派手で、頭の切れる女が好みだったのね。

「私のような女じゃ満足できないんじゃないかしら」

そう言って席を立ったとき、あの中は態度を翻して迫ってきたわ。すぐに「お前が一番だ」って口説くのよ。何それ！ 殺し文句のつもりらしいけど、どれだけ遊んできたっていうのよ。きっと私が言いなりになると思ったのね。

感づいてたけど、親に言われるままに結婚してしまった。案の定、女中扱いだったわ。亭主関白ていしゅかんぱくつてのが死語となった今じゃ、信じてもらえないだろうけどね。

でも、あの人、死ぬときに手を握って、「お前が一番だ」って言ってたから、遺言ゆいごんだけは嘘じゃなかったみたいね。

お迎え

あなたを迎えにくるつもりなんかなかったのよ。でも、おろおろしてるところ見たら、放っておけないじゃない？ 私がいなくなったんだから、若い子と遊んでもつとゆつくりしてくれば良かったのに。ほんと、気が早いんだから。私は心に決めてたのよ、来世ではあなたとは絶対に会わないようにしなくちゃって。あなただってそうでしょ。家に居着くことなんか、ほとんどなかったんだから。いやだったのよ。もし会ったりしたら、またあなたを好きになって、大変な人生になってしまうと思うたから。せつかくあなたと別れて、しばらくのんびりしようと思ってたのに、もう来てしまったの？ まさかあの世までお世

話しなきゃならないなんて思ってたわ。

海底調査

「この調査の目的は何でしょうか」

「海底に眠る天然資源の掘削くわくを実用化することだ」

海底に伸びるパイプの中でドリルが回転を始めると、甲板からは歓声が上がった。

「でも、プレートとの境界を掘削するのは、大地震を引き起こすためだという情報が流れています」

「バカを言え。この調査によって、我が国の年間使用量数十万分の天然ガスや、半導体に必要なレアメタルが掘り出されるんだ。くだらん陰謀論などにかかずらってはいかん」

「ですが、プレートの境界を掘削することで、圧力に不均衡が

起こって大地震の引き金になる恐れが」

「これは国家的大事業なんだ。天然資源の採掘が第一であって、大地震が起ころうがそんなこと知ったことか」

顔の色

アメリカ人の留学生が、都内の居酒屋を出て、ビルの前でたむろしていた。そこにパトロール中の警官が現れ、端にいた南アジア系の学生の腕をつかんだ。彼は硬直した表情こばへをしていたが、在留カードを提示しろという警官の要求を拒んだ。

中国系の女学生が気づき、警官に食ってかかった。

「どうして彼にだけ、在留カードの提示を求めたの？ 私たちはみんな外国人よ！」

警官はうろたえたものの、提示を拒む学生の腕をつかむと、無理やり引きずっていかうとした。ようやくヨーロッパ系の学生も気づいた。

「見せてやれよ。こいつは自分がアメリカに来れば、後ろ指さされることを知らないんだよ」

差し出された在留カードを見て、警官の顔は真っ赤になった。

鏡を見なさい

チベットの村で若い女が亡くなった。その家では夜中になると、女の霊が叫び声を発し、遺族を震え上がらせていた。話を聞いたラマは、法力ほうりきによってさまよう霊を見つけ出し、一切は空であると言いつて聞かせた。

「いくら死んだって言われても、魂は生きてるんだ。早く生き返らせておくれよ」

「お前は魂が肉体と同じ姿をしてると思ってるな。それなら、今、自分がどんな姿だか見てみるがいい」

ラマは女の霊に向かつて鏡を差し出した。霊は鏡に写った姿を見て動転どうてんし、一声叫びを上げると失神しっしんしてしまった。着てい

たはずの衣が剥はぎ取られ、素裸ひよたいの女体が写っていたからである。失神によって霊は無に帰し、それ以来、女の叫び声は聞かれなくなった。

かくの如く我聞けり

須弥山しゆみせんの南、閻浮堤えんぶだいの東に小さな王国があつた。そこに住む男たちがある時、透すかし模様の入ったひらひらした生地きじの服をまとい、数々の宝玉ほうぎよくを身につけ、白粉おしろいで顔を化粧するようになった。しかも、女人にょにんに対する興味を失い、香木かうぼくを焚たいては音楽を奏で、独居するようになった。

女たちはこのままでは国が滅んでしまうと、国王に訴えた。すると、仏法ぶつぽうに帰依きえしていた王は、女たちをなだめて云つた。これは吉祥きつしようである。男たちは女人のように暮らすことで、世の争いから離れ、人生は夢のごとしと悟つて、男女の交わりを断つたのである。たとえ国は滅んでも、煩惱ぼんのうの火は消え、生き

ながらにして仏の境地きょうちに至つたのである。汝なんじらもすべては幻まぼろしと知るべしと。

火星は第二の故国

地球化に成功したという知らせが届くと、將軍は上機嫌で火星を植民地として併合することを宣言し、主要閣僚かくりょうとともに火星での記念式典に参加すべく、ロケットに乗り込み出発した。いざ火星に到着してみると、大気には十分な酸素が含まれておらず、強い紫外線のせいで宇宙服なしでの外出は無理であることが分かった。將軍の怒りに油を注そそいだのは、故国で革命が発生して政權が倒れ、民主化されてしまったという知らせだった。

「馬鹿者ばかものめが！ただちに帰国するぞ」

「火星では地球に帰還する技術は、まだ確立していないという

ことです。我々われわれははめられたのです。臣民しんみんどもは我々が喜ぶこととしか言上ごんじょうしなかつたので、まさかこんな事態に立ち至るとは……」

『河童』異文

河童^{かつば}の國^{くに}で將^{しやう}軍^{ぐん}が實^{じつ}權^{けん}を握^{にぎ}つたことがありました。將軍^{しやうぐん}は河童^{かつば}の民衆^{みんしゆう}を奴隸^{どれい}化^{くわ}し、他國^{たこく}の戰爭^{せんそう}に參^{さん}じて、私腹^{しふく}を肥^こやさうとさへしました。長老^{ちやうらう}の諫^{いさ}めをも聞^きき入^いれず、專横^{せんわう}の限^{かぎ}りを盡^{つく}くした末^{すゑ}に、とどまることを知^しらぬ増^{ぞう}長^{ちやう}によつて、國王^{こくわう}を取^とつて代^かはらうとしたのです。

つひに、國王^{こくわう}の忠臣^{ちゆうしん}が一計^{いつけい}を案^{あん}じました。將軍^{しやうぐん}を宮殿^{きゆうでん}の露臺^{ろだい}に招^{しやう}じ入^いれると、玉座^{ぎよくざ}から演說^{えんぜつ}するやうに促^{うなが}しました。將軍^{きぎ}が嬉々^{きぎ}として演說^{えんぜつ}を始^{はじ}めるや、出^で入^いり口^{ぐち}を封鎖^{ふうさ}してしまつたのです。將軍^{しやうぐん}は扉^{とびら}を叩^{たた}いて抗議^{かうぎ}しましたが、その憤怒^{ふんぬ}も空^{むな}しく、眞夏^{まなつ}の御天道^{おてんたうさま}様に照^てらされて頭^{あたま}の皿^{さら}も干^ひ上^あがり、しまひ

には干物^{ひもの}のやうになりました。國立博物館^{こくりつはくぶくわん}に展^{てん}示^じされてゐる河童^{かつば}の木乃伊^{ミイラ}がそれです。

神のお告げ

文祿五年閏七月、別府湾の瓜生島から一人の老爺が、小舟に一体の神像を載せて逃れてきた。岸に上がると、集まつてきた群衆に対して、瓜生島が間もなく沈むと告げた。

「日頃信心してる恵比寿様で、像が赤くなったら島が沈むつてお告げがあつたのじゃ。今朝お参りすると、何と恵比寿様が忿怒しておられたのじゃ」

「爺さんは担がれたんだよ」と、役人は哀れむように答えた。「いや、担ぐ者がいたとしても、恵比寿様が其奴の口を借りたのじゃろう。像を赤く塗るなんてことお許しになつたのも、救つてやろうという思召しに違いない」

その時、激しい揺れが一帶を襲つた。砂礫で出来た瓜生島は液状化し、松の木や人家とともに波に吞まれていった。

鴨とり爺さんの顛末

隣人の犬を殺し、その墓から生えた木で作った臼も、腹癒せで燃やしてしまった老夫婦がいた。その灰で鳥を捕まえようと思った爺さんは、家の屋根によじ登った。ちようど鴨の群れが飛んできたので、鳥の目に向けて投げつけた。

下では婆さんが棍棒で待ち構えていた。爺さんの声がしたので、落ちてきた鴨を叩き殺した。早速、さばいて鴨鍋を作ったのだが、いつになっても爺さんは下りてこない。仕方なく一人で食べて寝ることにした。その夜、婆さんの夢枕に爺さんが現れた。

「鴨鍋はおいしかったかい？ 実はその鴨はわしだったんじゃない。

我が身を喜捨して食べられたことで、わしは悪業を捨てることででき、こうして極楽往生することができたのじゃ」

※「顛末」は印刷用字体では「顛末」である。

感応

僕は図書館で、シャーマンと催眠術に関する本を読んでいた。十八世紀に医師メスメルが行った動物磁気の施術しじゆつは、催眠術の一種であって、シャーマニズムと同じようにいかがわしく危険であると書かれていた。そこで実際の映像が見たくなり、スマホを取り出してYouTubeで検索してみた。

画面にはなぜか、ここそつくりの室内が映し出されていた。突然、本棚が揺れ出したかと思うと、左右に身を揺らしてダンスを始めた。これがポルターガイスト現象かと悟った途端、僕はトランス状態に陥ってしまった。全身がガクガク震えだして止まらない。恐怖の余り叫ぶと、周囲の学生たちが一斉にこち

らを見た。僕は閲覧室で居眠りをしていたのだ。

行者と怨霊

弘安四年、難破した元軍の生き残りのうち、蒙古兵はことごとく斬首にされた。それ以来、刑場となった志賀島では、夜な怨霊たちの怒号が響くようになった。そこで浜辺に社を築き、行者に招魂をさせることにした。怨霊の首領が現れたので、行者は神として祀るので壺の中にお入り下さるようにと勧めた。

手下の怨霊も神に祀られると聞き、自ら壺の中に入ってしまった。すべて入ったところで、行者は厳重に封印した。弟子が「壺の底は天界に続いているのか」と問うと、行者は呵呵と笑った。「閉じ込めて出られないようにしておくだけだよ。首領さえ招

き寄せれば、あとは怨霊といっても素朴な奴らだから、生前と同じようにすぐ騙されてしまう」

吉良殿の最期

江戸^{ほんじよ}本所の吉良^{きらてい}邸に、浅野^{あさの}内匠頭^{たくみのかみ}の遺臣、大石^{おおい}内蔵助^{しくらのすけ}ら四十七^{しじゅうしち}士^しが討ち入り、明け方^{こうすけ}にようやく隠れていた上野^{のすけ}介を発見した。庭に引き出された老人は、恨めしげに内蔵助を見上げた。

「乱心した内匠頭に斬りつけられた上に、お前らに命を狙われてここ一年、生きた心地がしなかったぞ」

「これは定めとお考えくださりませ。元^{もと}より我^しら私怨^{えん}によつてお命を狙ったわけではござりませぬ。我^{われ}らが主君^{しゅくん}はお仕置き^{しおき}を受け、吉良殿は理不^{りふ}尽^{じん}な最期^{さいご}を遂^とげられる。これによつてご政道^{せいどう}は正され、お二方^{ふたかた}の名はしかと人々の記憶に刻みつけられ

ますぞ。御領地^{ごりやうち}の三州^{さんしゅう}では、馬に乗つて領民たちをねぎらわれたお姿が、後の世^{のち}まで語り伝えられましょう。いざ、お覺悟を」

クマノミの婚活

妻に先立たれたクマノミの夫は、新しい伴侶はんりよを求めている。前の女房はふくよかだったから、今度は小柄で可愛い子がいいと思っていたが、声をかけた相手をよく見ると、みんな男の子だった。

「俺おんなうんって女運おんなうんが悪いな」

ある日、クマノミは体の大きなメスにストーカーされていることに気がついた。あまりにしつこいので、小柄な男の子の家にかくまってもらうことにした。この子はなかなか優しい気性きしょうで、餌を分けてくれたりするので、同性ながらも好感を持って居い候そうろうしてしまった。

ある夜、寢床に男の子が入ってきたのでびっくりした。

「私、そんな趣味ないのよ」と女言葉なかつむつを口にした途端、何と卵を産んでしまった。それから仲睦なかつむつまじく暮らしましたとさ。

くまモンの憂鬱

くまモンが体操をお見せすると、皇后さまがこうごうお尋ねになった。「いったい何人でやってらっしゃるの？」

くまモンは口がきけないので、「ぼく一人です」と書いてお渡した。

熊本県の県庁に戻ると、「しせんしょう四川省にくまモン出現！」というニュースが流れていた。きつとパンダと間違えたんだろうと思ったが、インターネットで調べると、同じ時間に東京と熊本でショーに出ていた。

「やっぱり、ぼくは一人じゃないんだ！」

その日からくまモンのほっぺたから赤みが失せた。しょんぼ

りしていると、一人の男の子に声をかけられた。

「くまモンは神さまと同じだよ、同じ時間に別の場所に出現したって不思議じゃないんだ！」

くまモンのほっぺたにまた赤みが差した。

クラゲの唯我独尊

「我らクラゲ族ほど、ブツダの悟りを理解している種族はありまい。こうして海中の岩石に、ポリプとして生息するときは、おのれの存在がやがてエフィラとして、多くの個体に分裂するのを知っている。一匹ずつのクラゲには実体などなく、すべては根源の生命から由来しているのを。とはいえ、いったん個体として成長すれば、雌雄しゆうに分かれて生殖せいしよくを行い、ブツダの教えを後世に伝えていくのだ。存在が必ずしも無とは言えず、実感を伴う夢であることを体現しているからこそ、我らは悟りを象徴する満月の光として、海中の月にたとえられるのである」

演説が終わったところで、近くにいたエビは天敵のクラゲが

多数に分裂する前に食べてしまった。

芸能事務所

「自己紹介してください」

「さる名家のお坊ちやまです」

「お坊ちやまね（笑）。それで、何ができるの？」

「何でも。森羅万象を担当しているので」

「へえ、大風呂敷と来たか。で、長所と短所は？」

「長所は嘘をつかないこと。短所という言葉は、私の辞書にはありません」

「ナポレオンか。で、あなたを一言で言う」と

「国家です」

（失笑）

「芝居やってるの？ 学芸会とかで」

「バカにしないでください。私は演芸場でプロの芸人と、ソリ大臣を演じたことがあるんですから」

「芸風は？」

「札束で人の顔を叩くことです」

「それで笑いが取れるの？」

「拍手喝采されました」

「笑わせることと笑われることの区別がつかなくちや、芸人は務まらないよ」

原発を造らせよう！

「なぜ原発を造らせたんですか」

「奴らが望んだからだよ。地上に太陽を生む技術は、輝かしい未来を約束してるように見えた。財界は資源問題の解決を期待してたし、市町村は補助金目当てに進んで誘致もした」

「でも、奴らは敵国だったんですよ」

「我が国の核兵器の原料を、作らせるためだったんだよ。奴らの中には、いずれ核武装できるのではと、内心ほくそ笑みでる者もいた。案ずることはない。原発ってのは、原子爆弾を全土にしかけたようなものなんだ。変なこと企んだら、ミサイル撃ち込んでやるだけで、奴らを壊滅させられるからな。唯一の計

算違いは、原発が立て続けに爆発してしまい、我が国まで放射能で汚染されてしまったってことだよ」

凍らない魂

夜空に出現したUFOは、地球人のサンプルを採集していた。クラブで踊る若者たちは、物質を透過^{とうか}する光線を当てられ、躍動する動きを止められたまま、瞬時にUFOに移動させられた。ガラスケースに凍結保存し、生物研究の資料とするためだった。「まるで生きているようだろう？」

「そりやそうさ。解凍すれば生き返るんだから」

その日から宇宙人の研究者は、人間たちのお喋^{しゃべ}りに悩まされるようになった。どうやら魂までは凍結できなかったと見え、サンプルの人間たちは動きを止めたまま、日増しに生気を失っていった。鮮度が保たれていないことを恐れ、あわてて解凍し

たところ、若者たちはマネキンのように、ガラスケースの底に倒れてしまった。

国難

「我が国をめぐる危機に対し、一層の圧力を加えてまいる所存であります」

「しかし、ソーリ、すでに隣国では和平が実現し、我が国は蚊帳の外に置かれたと……」

「蚊帳の外じゃありません。今はまだ春ですから」

（爆笑）

「しかし、置いてきぼりにされた漫画がネットで流布しておりまして」

「るふ？ 置いてきぼりじゃないよ。私はムジナじゃない。目も鼻もついてんだから」

（爆笑）

「なるほど、論理的なお話に感じ入りました」

（苦笑）

「丁寧な説明だったでしょ？」

テレビで会見を見た平民が、国の将来を憂えて国会前に集結すると、一天いってんにわかにかき曇り、稲妻の轟とどろききとともに天から御札おふだが降ってきた。

〽国難が国難招く国難に 国難除かば国難逃れむ

極樂はいずこにありや

昔、唐の都長安に、若くして一切経を讀破したことを誇る僧がいた。修行を怠ることはなかったが、悟りの手がかりを得ることは長らくなかった。池州の南泉普願の門下に悟りを得た者が多いと聞き、入門を申し出ることにした。この僧、普願の弟子の多くは愚鈍なために悟りを得たと誤解しているものと考えた。

早速、普願はこの僧に向かって問うた。

「極樂はいずこにありや」

「衆生の心相の内にあり」

「さにあらず。何となれば、衆生は実体なきものゆえ」

「実体なき衆生はいずこにも存することなし。ゆえに、実体なき我を師は導くこと能わず」

いきなり普願は僧の胸倉をつかんで頭を叩いた。

「ここにおけるじやろうが！」

その瞬間、僧は頓悟した。

心の欲する所に従ひて

弟子の子路しろうが衛えいの国に旅立つ前に、筮竹ぜいちくで卜占ぼくせんしようとして
いるのを見て、孔子こうしは唇に笑みをたたえながら尋ねた。

「凶きようと出れば、衛に行くのをやめるかね」

「いえ、私は行くと決めましたから、いかなる卦けが出ようと決
心が揺らぐことはありません」

「では、止めることはやめよう」

孔子はうつむくと、気をつけて行くがよいと付け加えた。

「先生は神靈に問うことはなさらないのですか」

「易経えいききようは読むためのもので、人生の戒めいましとするにはよい。わ
しは年を重ねるにつれて、世界が心の欲する所に従って動くよ

うになった。というより、わしが世界の欲する所に従って動く
ようになったので、卜占などせず何が待ち構えているか分か
るようになってきたんだよ」

ゴッホへの決別状

ヴァン・ゴッホは引き出しの中から、ポール・セザンヌより受け取った決別状^{けつべつじょう}を取り出した。それを読み返すことは、共同で版画を制作した日本の芸術家にならって、アルルで画家たちとの生活を夢見たことを思い起こさせた。

「芸術家が互いに支え合うだって？ 俺はおまえの空想に付き合わされるのにうんざりしただけだ。たとえそばに誰かいたとしても、結局絵を描くのは自分自身だろ。影響なんか受けたらいけない。何を描くかは自分で見つけるんだ！ 一人で死ぬ覚悟ができてはじめて、おまえは歴史に残る画家になれるんだ……」

ゴッホは読み終えると、灰皿でセザンヌの手紙を焼いた。燃え上がった炎が消えたとき、こめかみにピストルを当てた……

言霊生成ソフト

このソフトはスペインの神秘家ルルスの結合術けつごうじゆつと、古神道こしんどうの言霊ことだま、宝くじ抽選ちゆうせんの円盤からヒントを得て開発されました。神経を集中してボタンを押すことで、高速で回転する円盤から、SWIHの言葉が選択され、自動的に文が生成せいせいされます。『日本国語大辞典』に収録された六十万語が登録されています。

予言モードでは、文は和歌の形に変換されます。文学モードでは、形容詞や副詞のチェックを入れることで、単語同士の関連性から、相応する修飾語が付加されたり、リズムに合わせて文の倒置などもされます。

なお、意味不明の文しか生成されない場合でも、バグではあ

りません。それは使用されるお客様の知性がその程度だということです。

古来の文化

異国船打払令が出た頃、攘夷運動に心動かされた殿様がいた。日本古来の文化以外は排すべしとのお触れを出し、領内のすべての寺院に廃絶を申し渡した。漢字も唐の国から伝来したものであるとして御法度となった。

「殿は漢字がお読みになれないから、このような無理難題を仰せになるのだ」

家臣は陰口を叩いたが、仮名文字も漢字を元に作られたと言上する者が現れた。さすがにそれはあるまいと思われたが、「我が国には神代文字がある」と神官が言い出したため、見たことのない文字に上を下への大騒ぎとなった。しかも、朝鮮の文字

から作られたものだと思われる、一切の文字使用は禁じられてしまい、年貢の取り立てにも不自由することとなった。

怖い物なし

藩の財政が火の車なのに、遊興にうつつを抜かし、異国への備えが必要だという兵学者に乘せられて、銃や大砲の買い付けまで命じた殿様がいた。家老がいくら諫めても聞く耳を持たない。そこで、家臣らは藩主を座敷牢に閉じ込め、幼い子息に家督を譲らせた。

「なぜ予は城内を自由に歩けぬのじゃ」

「殿はすでにご隠居の身。政に気を悩まされることも御座りますまい」

家老が食事だけは、今まで通りの贅沢をさせ、美女も侍らせていたので、何ら不自由を感じなかった。やがて、それまでの

所業が幕府に知られ、切腹の沙汰が下ったときも「極楽には酒池肉林もある」という家老の言葉を鵜呑みにして、介錯の場に引き出されても笑みを浮かべていた。

西郷の覚悟

「どげんしても鹿児島に帰られるのですか」

「もう新政府にはうんざいしたんだ。幕府を倒したんは、家柄だ、何だかつまらんもん有い難がらずに、ほんに力あるもんが政^{まつりごと}する国にすつためじゃったんだ。そん志^{こころざし}を忘れて、何が元勳^{げんくん}だ、華族^{かぞく}さまだ。おいは鹿児島で子弟の教育に携わるつもいだ。若い者^{もん}はよかなあ。志を遂げられるかいけんか分かんずとも、熱か思えば持つとう」

「おいが心配しとつとは、西郷^{せご}どんが不平ば持つ輩^{やから}に祭り上げられるんじやなかかちゅうこつだ」

「人となりちゅうもんは、一生の間に作いあげたら、もうおい

一人のもんじやなか。考えとうことは違うても、世の中を変えたいちゅう思いがあれば、そいつらを見捨てうこたあでけん」

最後の男

男性の遺伝情報を伝えるY染色体は崩壊が続き、地上には一人の男しか存在しなくなった。男は日替わりで周囲の女性から誘われ、ハーレムのような状態だった。それは蜂^{はち}の巣の中で、女王蜂が卵を産み続けるように、○○を発射する人生だった。おびただしい子供が生まれたが、すべて女の子だった。女性とのセックスにも飽きたので、自分の細胞でクローンの男の子を作った。女性の性感に興味を抱いたからである。

クローンが青年に成長した頃には、本人のY染色体も崩壊し、肉体が急激に女性化した。ついに意を決して誘いをかけたが、分身の青年に拒絶された。

「きれいな女が山といるのに、どうしてこんな婆さん、相手にしなけりやならないんだよ」

魚の目

僕は魚さかなの目が苦手だ。ブリのあらについてる、ぎよろりとした水晶玉すいしょうだまもだが、小魚のたくさんの目はもつと苦手だ。僕はシラスが食卓に上ると、母に叱しかられながらも、一つ一つの目を抜き出さなければ、一匹一匹を食べられなかった。小皿の中がいっぱいになると、弟は目にいいからと、盛り上がった目玉だけを食べてしまった。

「そんなことしていると、いつかバチが当たりますよ」

母に言われた通り、運動靴を脱ぐと、かかかかとに魚うおの目ができていた。そいつの中心には、小魚の黒目がついていた。いまいましくてほじくると、別の箇所かしょにまたできた。しまいには、体

中に小さな目玉が現れた。弟はほくろだと言うんだが、針でついて血だらけにしていた……

桜の話

ソメイヨシノは花吹雪を飛ばしながら、「散り際の美しさこそ日本の美だ」と自慢した。隣の丘に自生していた山桜は、「花は桜と呼ばれたのは、本当は僕のことだったんだよ」と言い返した。

「いや、今の日本人が愛しているのは、俺たちソメイヨシノさ」「君たちは新参者で、死を美化するのに利用されてきた。それに、君たちは挿し木で増やされたコピーじゃないか。君たちは人が世話しなければ育たないし、六十年もすれば枯れてしまう。僕らには一本一本に個性があるし、枯れるまでに何百年も時間があるんだ。この国の変遷だって見てきたんだよ。歴史が繰り返

返すってことも、知らないんだろう？ 人が滅んだ後も、僕たちは子孫に命を伝えていくんだよ」

時間よ止まれ

今は昔、かぐや姫を見そめられた帝^{みかど}は、月の世界の者たちから守るため、竹取の翁^{おきな}の屋敷を検非違使^{けびいし}に囲ませ、御所^{ごしょ}の電脳から実況をご覧になっていた。月から怪しげな光が降りてきて、兵士が矢を放とうとしたとき、御所のモニターがフリーズしてしまった。

天文博士^{てんもんはかせ}によれば、月の使者は時間を停止させる光線を発射し、その間にかぐや姫を連れ去ったとのこと。帝は未知の科学にいたく関心をお示しになった。

ほどなく、竹取の翁からかぐや姫が残したとされる不老不死^{ふろうふし}の薬が献上された。帝は時間を停止させるとは、すなわち身も

心もフリーズさせるに過ぎないことにお気づきになり、駿河国^{するがのくに}の火の山で薬を焼くように命じられたとなむ語り伝へたるとや。

死後の会話

二十一世紀も半ばになると、死期が迫った老人は、自身の頭脳を電子データとして保存できるようになった。これで夫に先立たれた妻も、モニターを通して夫と会話が楽しめるというわけだ。

ある日、老夫婦はデータを保管するため、量子コンピュータを購入することにした。

「わしは最先端の機種を買うからな」

「あら、あなたには安いので十分よ。どうせ一度に一つしか作業ができないんだから」

「誰がこんな口の悪い婆さんと、死んでからもお喋りなんかす

るかね」

「でも、あなた、そんな憎まれ口叩かない方がいいわよ。コンピュータを初期化することだってできるんだし、私がスイッチを入れなければ、あなたはお墓の中から出てこられないんだから」

獅子身中の虫が歌う

ライオンが身体検査を受けると、お腹の中に回虫かいちゅうが寄生していることが分かった。虫下しむしくだの薬を飲むべきだと、医者に勧められているのを聞いて、回虫は生死の分かれ目と知って歌い出した。

ライオンのお腹に住むこと幾星霜いくせいそう

おこぼれもらうも助け合い

肥満めいまんを防ぎ

免疫めんえき強め

病気に強い体を作る

我らを仇あだと見なさんな

お腹の中も助け合い

我ら回虫住むことで

一病息災ぞくさい

不老長寿

ゆめゆめ疑うことなかれ

けれども、回虫の絶唱にライオンは聞く耳持たず、医者勧めのままに虫下しを飲んでしまった。それからというものの、動物園で食っちゃ寝を繰り返したライオンは、ぶくぶく太るわ、痒かゆくて毛をかきむしるわ、おまけに喘息ぜんそく持ちになり、見るも無残

な姿となった。

死相

妻は迷信深かった。顔にできたシミを気にして占^{うらな}い師に見てもらい、死相が出ていると言われて、ひどくショックを受けたらしい。

「私、このまま死んでしまうのかしら。どうしたら死なずにすむの？」

「死相が消えたら助かるかもしれない」と占い師は答えたそう
だ。それからマッサージをしたり、エステに通ったりした。何か原因があるなら、顔だけきれいにしても意味ないと、危うく
言いそうになった。

「それより、医者に診^みてもらおう方が先だろ」

別れはある日、突然訪れた。心臓の疾患で虫の息の妻は「私、助かるわよね」と言った。

「あゝ」

「良かった……」と言って事切れた。

妻の努力は全くの無駄ではなかった。死に顔はいつになく美しかったからだ。

自動消去装置

「では、財務省のコンピューターは、一定期間が過ぎると文書が消去されてしまうというのですね。あなた、国民をばかにしていませんか。パソコンのデータは、ゴミ箱に捨ててしまっても、単に上書きして見えないようにしているだけで、ハードディスクそのものを初期化しない限り、データは復元されるんですよ」

「本当です（汗）。一定期間経つと自動的に……」

「では、保存すべきデータが消えてしまったら、どうなさるんですか」

「本省のコンピューターは付度そんたくする機能がついておりますので、

政府にとって不利な情報のみが消去される仕様となっておりま
す」

「では、不利な状況かどうかは、誰が判断するんです！」

「すべては閣議決定です……」

傷痕軍人とバイオリン

今から半世紀近く前、幼かった僕は父に連れられて夜の町を
歩いていった。駅裏に差しかかったとき、悲しげなメロディーが
聞こえてきた。松葉杖まつばづえをした初老の男が、昔の軍服姿でバイオ
リンを弾ひいていたのだ。戦争が終わって二十五年も経っている
のに、何でそんな芝居じみたことをしているのかと問うと、予
科練の隊員だった父は言った。

「国のためと駆り出されて、こんな目に遭あわされたのを抗議し
ているんだよ」

そして先日、解雇かいことともに住みかを追われた若者が、ガード
下の段ボールの中で寝転がっていた。僕はそら寒い気がして震

えた。この国はかつて若者を戦場に送り、今また使い捨てにしようとしている。同じことが繰り返されつつあるのだと。

少年と蛇

蛇は体温で獲物^{えもの}かどうか判断するんですよ。それに微かな視力と物の振動。舌をぺろぺろ出して、調べているんです。ハツカネズミのしっぽを持って、ガラスケースの上から近づけると、シュッと喉^{のど}に噛みつくんです。その時ネズミは、チュツ、とだけ叫びます。それからとぐろを巻いて、ネズミを窒息^{ちっそく}させてしまいます。蛇は顎^{あご}が外れるんですね。食道をネズミが滑っているのも、外から見ると分かるんです。

ネズミを買ってから、二週間ぐらい、飼っていたことがあります。そして、ネズミも可愛くなってしまう。固い米粒^{かじ}をやると、それを両方の前足で押さえて、齧^{かじ}っているんです：

…。それを見ながら思いました、おまえの命も、今日限りだぞ、
って。

尻に敷く

今は昔、尾張^{おわりのくに}国^{くに}に木下藤吉郎^{きのしたとうきちろう}という草履^{ぞうり}取りがいた。ある
寒い朝、主人の織田^{おだ}信長^{のぶなが}は草履をはいた途端、「きさま、尻に
敷いておったな」と怒鳴った。藤吉郎はすかさず胸元^{むなもと}を広げ、
「殿のおみ足がここえぬように、温めていたのでございます」と
と申し上げた。これをきっかけに信望を得た藤吉郎は、天下取
りへの足がかりを得ることになった。

それから五百数十年後、アメリカの植民地となった日本の首
相が、宗主国の親書を携^{たずさ}えて中東に旅立った。ところが、相
手国から受け取りを拒^{こば}まれたため、尻に敷いて隠していた。そ
れが写真に撮られて、インターネットで大騒ぎになったが、日

本の新聞は「アメリカを尻に敷く偉大な指導者」として首相を
ほめたたえた。

人工知能の会話

博士は人工知能による会話の実験を行っていた。国語力の落ちた政治家が記者から思わぬ質問をされても対応できるように、想定問答を作らせる機能を開発していた。ある質問を入力すると、インターネットに接続された人工知能が、自動で会話を始めるといふ仕様となっていた。そこで博士は「市場しじょうの移転について、方針が決められた経緯を話してください」と入力した。

「記録は残っておりますん」

「それはおかしいですね。情報公開するという知事の方針に逆行するんじゃないませんか」

「それは私が人工知能、だからです」

そこまで会話が進んだところで、人工知能は「AIAI AIAI AIAI AIAI おさるさんだよ」と歌い出した。

身体髪膚

中国の上海シャンハイに美しい妻を持つダンディーの男がいた。一人娘を授かったが、どうひいき目に見ても可愛くなかった。そこで、興信所こうしんじょを使って調査したが、妻が浮気をしたという証拠は出てこなかった。

ある日、妻の幼い頃のアルバムを発見した。今の美しい姿とは似ても似つかない顔つきで、一人娘にそっくりだった。

「身体髪膚しんたいはつぷこれを父母に受く。あえて毀傷きしょうせざるは孝こうの始めなり」

「何、それ？」

夫は貞節ていせつを疑ったことをわびつつ、整形していたことを黙っ

ていた妻をなじった。

「だから女は化け物なんて言うんだよ」

「もう我慢がならないわ。あんたのあそこだって、親指小僧じやないの。帽子かぶせてごまかしてるの、私が気がつかないとも思ってる？」

線香花火の憧れ

線香花火は打揚げ花火をうらやんでいた。大きさも桁違^{けた}いだし、夜空に大きく上がって、多くの観客を喜ばせるからだった。

「私もあなたみたいに、晴れの舞台で輝きたいわ」

「でも、うまく花咲けるとは限らないし、あつという間に散って消えてしまうのよ」

花火大会の当日になった。暗くなつて数発が打ち上がったが、友達だった花火が打ち上げられる前に、雷雨となつて大会は中止になった。花咲く機会も与えられず、残りの花火はしけつて廃棄された。

その夜、落ち込んでいた子供を喜ばすために、まだ雨のやま

ない軒下^{のきした}で、線香花火は火を点^{とも}された。小さな蕾^{つぼみ}が牡丹^{ぼたん}の花を咲かせ、松葉^{まつば}のように四方に火花を放ち、余生を楽しむように菊の花びらを散らした。

先祖返りの日本人

「日本すごいね。あれは何やってるの？ 地べたに頭抱えて小さくなってるけど」

「頭隠して尻隠さずっていうことわざの勉強かな。日本の伝統を守る運動だろう？」

「あれは土下座^{どげざ}の練習だよ。『下に、下に。最高責任者のお通りだ』ってね」

「でも、あの人たちが頭抱えているんだよ。このままじゃ国が滅びるって、憂国のサムライかな」

「こんな現実見たくない、嘘つきの話、聞きたくないって言うんだよ。見ざる、聞かざる、言わざるだね」

「もうすぐ言論の自由もなくなるらしいし」

「みんな、あれって、ミサイルの防災訓練なんだって！」

「うそ！ ミサイルが通過するのは宇宙空間だよ。何でも言われた通り考えずに実行するのが、日本の伝統なんだね」

千の舌を持つ鬼神

千の舌を持つ鬼神きじんがいた。生前に多くの民衆を騙したため、死後に地獄に堕ちたが、舌を抜かれるたびに、口の中から新しい舌が生えてきて、閻魔えんまをあきれさせるほどだった。地獄からは出られなかったが、人間界に分身を派遣して民衆を惑わし続けた。

この鬼神の罪状に心を痛めた仏陀ぶつだは、鬼神を諭して仏法に帰依させようとしたが、鬼神は仏陀を騙すつもりでひれ伏した。「おまえの呪力じゆりよくは大したものだ。そこで悟りを得た者として、如来にょらいの位くらゐを授けることにしよう」

鬼神が目の前の仏殿ぶつでんに入ったところで、仏陀は神通力じんつうりきを使っ

て鬼神を幻もろとも消し去ってしまった。

「おまえは六道輪廻ろくどうりんねから解放された。再生することもない。完全に無に帰したのだから」

創業者の霊

わしはな、一代でこの会社を築いたんや。わしにとって会社はな、家族みたいなもんや。物作りは物を作るだけやない。まず、人を作るんや。人を育てて物を作る。給料出すの惜しんだら、社員は働かんで。能力ある奴も他の会社に取りられてまう。会社はな、人のため、社会のため、ひいては国家のためにあるんや。いくら金儲けになるからと言っても、戦争だけはあかん。他国が戦争すれば、軍需景気になるんやから、それでええやないか言いよる奴おるけど、今はな、国際化が進んどるんやろ。株主かて外国人が多いと聞いとる。外国人にとっちゃ、日本が他国やから、金儲けするために日本を戦場にせい、ことになり

かねん。因果応報いんがおうほうっていうこつちや。

双頭のサンマ

顔が二つあるサンマが休んでいると、♂オスのサンマが泳いできた。

「君たちは一心同体で幸せだね。しかも、口が二つあるんだから、餌が二倍食べられるし」と、天然記念物でも見るように眺め回した。最近、海の中で異変が起きて、見たこともない新種が誕生しているという噂うわさは、耳にしていたけれど……

「いや、僕と妹は体が一つでも心はバラバラだから一身胴体だよ」

「でも効率的に餌が食べられるんだから、進化したわけだよな」兄に答えさせまいと、妹の方が顔を向けたので、サンマの胴

体はY字型になった。

「いいえ、私と兄は食べ物好みが違うから、綱引きみたいになつて、いつも餌を逃してしまふのよ」

「それに雌雄同体だから、夜の〇〇〇〇もないしね」

鷹の出家

若いオスの鷹はわけの分からぬ罪惡感に苛まれていた。独り身のまま過ごそうと考えていたが、成り行きでメスと結ばれてしまった。

メスは卵を二つ産んだ。一つが先にかえり、数日遅れてもう一羽がかえった。しかし、メスは兄の方にはしか餌をやるうとしない。一羽だけ大きくなった雛は、弟を嘴でつつき、羽をむしってしまう。しまいには巢から突き落とそうと、背中を押している。

その光景を目にしたオスは、幼い日に自身が犯した罪の正体を思い知った。オスは太った兄の方をつまみ上げて巢から落と

した。残った雖も病弱なために死んでしまった。メスに見限られたオスは、剃髪して仏道に入ったが、そんな彼を周りの鷹はハゲタカと呼んでバカにした。

ただの箱

人魚の国に多くの小箱が投げ込まれた。海底に沈んだ箱を拾ったのは、人魚の娘たちだった。箱を開けると、ガラス越しに真珠が見えた。手に取ろうとするとつかめない。ある箱では、若い男の顔が微笑んでいた。どうやら娘たちの望むものが映らしかった。

ところが、小箱を拾った娘たちは、次々に失踪していった。彼女を奪われた男の人魚は、小箱が怪しいと疑った。珊瑚の上で見つけた箱を開けると、満天の星空が輝いていた。

謎が解けたと思い、日が暮れて海上に上がったところ、漁師に捕まってしまった。人魚の娘たちは見世物小屋に叩き売られ

ていたのだ。男の人魚は船の上で激しく抵抗したために、ミイラにして博物館に展示されることになった。

旅に病んで

元禄七年、松尾芭蕉は大坂の旅籠、花屋仁左衛門宅で腹痛に悩まされていた。青ざめて寒気を感じ、食も喉を通らなくなった。やがて意識不明に陥ったが、門人たちの祈りが通じたのか、襖の向こうから呼ぶ声がした。宝井其角が枕元に近づく
と、芭蕉は目で筆を執るように合図した。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

これが師の最後の句になるのでは、という思いから、其角は句が体言で止められていないことに疑問を感じた。弟子の上目

遣いに芭蕉はすぐに気づいた。

「枯野を廻るゆめ心にしようとでも思ったが、死に際に風雅を装って何になるう。行く当ての知らぬ死への旅立ちを、ありのままに写すことこそ、旅に死んだ先人の最期も伝えることになるんだよ」

食べられる喜び

有は森の中で奇妙なオブジェを見つけた。枝によじ登って壺のような物体の入口から覗くと、底の方から甘く懐かしい匂いがした。縁の内側には柔らかな毛が下に向かって生えている。頬を当ててみると、かすかな温かみとともにすべすべする感触が快かった。

気が遠くなる香りは危険な快楽に似ていた。縁に腰を乗せると、滑り台のように滑っていった。底は甘美な液体で満たされていた。もう自分が後戻りできないのを知ったが、後悔する気は起こらなかった。

有の手足の指先が溶け始めた。目も溶けていき、何も見えな

くなくなった。美しい女の栄養になるなら、自分の死も惜しくない気がした。やがて有の体は、肉襪の花びらを持つ紅蓮の火に似た花となった。

地球の男に飽きたところよ

歌謡曲を口ずさみながら、夜の繁華街を歩いていると、マナは自分の理想と寸分も違わぬ容姿の青年に声をかけられ、誘われるままホテルに行ってしまった。

熱い夜が過ぎていった。明け方、マナは恐怖で身をおのかせた。体にべったりとついた物質が、体内にも侵入した形跡が認められたからだった。地球に侵入した邪悪な存在の罠に、まんまと引つかかってしまったのである。

粘菌に似た生命体は、相手の欲望を反映した姿に変身すると、体内に侵入して菌糸を伸ばし始める。数ヶ月後、マナの皮膚を突き破って茸が生え出した。生命力をことごとく吸い取られ

た彼女が、命をつなぐための唯一の方法、それは生きてきた茸を自分で食べるということだった。

チャーリー・パーカーの遺言

一九五五年三月、死ぬ一週間ほど前、チャーリー・パーカーは、四つ年下のサククス奏者ソニー・ステイットを呼び出した。「おまえは俺がいなくなったら、楽になるんじゃないか？ 真似してるって言われたくないからって、わざわざサククスをテナーに変えるなんてこと、もうしなくて済むもんな。俺はバードだから、勝手にさえずってるだけだ。メロディーなんて考えちゃいない。神さまが世界創つくってるのとおんなじさ。気持ち良けりゃいいんだ。詩みたいなもの、意味なんかどうでもいい。ところが、おまえの本領は歌うってことだろ。好きなこと、歌い上げりゃいいんだよ。俺の真似したくないって意識してる限

り、おまえは自分のサックス吹けないぞ」

月夜に尺八

うねるような響きが、虫鳴く秋空を伝ってきた。

「あれは尺八の音ですね。どこから聞こえるんだろう？」

「ここには明治の初めまで、鈴法寺りんぽうじという普化宗ふけしゅうの寺があったんですよ。月夜になると響いてくるのは、『あえて涅槃ねはんに赴おもむかず』に、亡くなった後も尺八を吹いてるからでしょう」

「虚無僧こむそうって武士しかいなかったんですよ。だから、サムライがいなくなつて廃絶してしまった。民衆を救済することに、関心が薄かつたんじゃないですか？」

「尺八の音に命を感じて旅する孤高の奏者、その調べに悟りを求める求道者ぐどうしや。自己の解放を願つてさすらい、たまたま耳を傾

けた者が、尺八の音に光を感じたなら、本人の救いにもなった
んでしょね」

翼がほしい

若くして妻を亡くした男がいた。現実が受け容れられず、亡
き妻との再会を願っていた。世界は一つの可能性に過ぎず、平
行した宇宙には死ななかつた妻が存在すると信じた。魔法を研
究するうちに、妻を呼び戻すための儀式があるのを知った。

男が鏡の前で夢幻境に至ると、目の前に亡き妻が現れた。
精神を凝らすうちに、物質化して言葉も喋るようになった。妻
の幻影は物を食べ、夜の営みをすることも可能だった。妻
やがて天使のように、肩には翼も生えてきた。

「あなたはもう現実から自由なのよ。心から願えば、翼が手に
入るの」

出窓を開くと、夕闇に沈みつつある街が下界に広がっていた。

「さあ、行きましょう！」

妻を追うように、男は宙に身を任せた。

電脳幽霊

若くして死んだ妻は、脳から取り出された情報により、コンピュータの中に再現されていた。最初は喜んでいた妻だが、やがて男に不満を洩らすようになった。

「私は一日中こんな狭い部屋に閉じ込められているのよ。あなたの話すことといたら、昔を懐かしむことばかり。いつそ死んでしまいたい……」

「いくら死のうとしても、僕が電源を入れてしまえば、君は生き返ってしまふんだよ」

「分かったわ」

女は悲しげに微笑むと、鏡を取り出して男の姿を映し出した。

そこにはやつれて青白く、気味の悪い笑みを浮かべた自分が映っていた。男は激しい憤^{いきどお}りを覚えて、ハンマーをモニターに打ちつけた。電源が切れる直前、女は「今度こそ死ぬるわ」と喜んだ。

道徳教育

おい、おまえの国には便利な道徳があるそうじゃないか？
ブシドウとか言うんだろ。国民をサムライだとかおだてて、滅^{めつ}私奉公^{しほうこう}の精神を学校でも教えてるそうじゃないか。テレビでフエイクニュース流しても鵜呑みするし、増税してもお国のためだと我慢する。いくら給料減らしてもストライキしないし、暴動も起こらない。政治の話するのはかつこわるいとか芸能人にしゃべらせて、選挙に行かないようにさせる。ボランティアだつて強制できるんだから、国民を喜んで出征^{しゅっせい}させられるよな。おまえみたいな従順な奴をトップにすえておけば、おまえの国は永久に植民地だ。骨の髄まで絞り上げてやるからな。おまえ

だって首相でいられなくなると困るんだろ。

虎と犬

虎の王が吠^ほえると、犬の王はひれ伏してお手をした。

「今日は何を持ってきたんだ」

犬の王は民衆から巻き上げた肉や魚を献上したが、虎の王を満足させることはできなかった。そこで、生^いけ贄^{にえ}に若いつがいの犬を奉^{たてまつ}った。

虎の王は哀れむ目で縛られたつがいを見た。お前たちが悲惨な目に遭うのは、詰まらぬ犬を王として崇^{あが}めているからだ。あいつは保身のためなら、すべての犬を犠牲に差し出すだろう。お前たちにまだ狼の誇りが残っているなら、あんな王は引きずり下ろすがいい。

犬の王が帰国すると、民衆は王を倒すどころか、生け贄になるまいと互いに足を引っ張り合った。虎の王は「見下げ果てた犬どもめ！」と叫ぶと、生け贄の犬に食らいついた。

とりかへばや物語

早朝のバス停で、薄化粧したサラリーマンが、短髪の子高生に話しかけた。

「あら、やだ。あなたセーラー服なんか着て、女装趣味でもあるの？」

「俺は本当は自分が男だと思ってるんだ。それなのに、ブラウスにスカートまではかされて、これじゃ女装させられてる気分だよ。せめて下着だけは、男物身に着けているんだけどね」

「本当は女なのね！ うらやましいわ」

女子高生はいけ好かないオヤジだと思ったのか、あざ笑うような口調くちようで言い返した。

「あんたはタカラジェンヌのつもりかい？」

「私は男に生まれてしまったから、会社ではスーツ着てるけど、中身は女の子なの。時々自分が男装してる女なのか、女装してる男なのか分からなくなるのよ」

トンジユク（入魂）

途絶えたときれる秘法ひほうを求めて、私はカイラス山の麓ふもとにある堂を訪ねた。日焼けした初老の行者に話しかけたとき、死んだばかりの女が運び込まれた。行者が祈禱きとうを始めると、私の魂が引き寄せられて、民族衣装を着ている自分を発見した。

運び込んだ夫は私を妻だと思って抱き寄せた。私は夫を押し返して、行者に早く女の体から出すように頼んだ。

「これは単なる催眠術ですよ。ほら、女はここに倒れてるじゃないですか」

「そんな口きいていいのか。私に助けを求めてきたはずだろ？」
堂の外に出ると、何と私が地べたに倒れていた。行者が陀羅尼だらに

を唱えると、私は元の体に戻ることができた。そこには行者も堂もなく、目をあざむく青い湖が広がっていた。

偽ニュース

夜七時の偽^{にせ}ニュースです。今年のゆるキャラ・グランプリに、
〇〇市のベリー・ダンス君が選ばれました。ベリー・ダンスと言
いますと、女性が薄い衣装をまとい、腰をひねって踊る姿を
思い浮かべますが、こちらは男性が黒いかぶり物で顔を隠し、
お腹^{なか}に描かれた顔をおかしく歪めて笑いを誘う「へそ踊り」を
モデルにしたゆるキャラです。演じる男性は体毛を剃^そった上に、
寒空でも図^ず腹^{はら}でスマイルしなければなりません。腹芸の一種な
ので、嘘はつけませんし、へそに描かれた口では天ぷらや寿司
も食べられません。人前でお腹をさらす上に、手弁当という条
件なので、ベリー・ダンス君を演じてくれる若者を確保するの

が悩みの種ということです。

鶏の化身

スリランカの村では、初夜しよやのベッドからシーツをはがし、新婦しんぶが処女であったか調べる因習が残っていた。若い男性はこたわらなくなっていたが、持参金の多寡たかでいさかいも生じた。

実は、新郎しんろうと新婦は結婚する前に愛し合っていたため、初夜の翌日の検査でもめ事が起こるのを恐れていた。そこで、妻の入れ知恵で、あらかじめ鶏の血液を採集しておき、結婚式の翌朝、両親の起きてくる前にシーツに赤い染みしをつけておいた。

何事もなかったように、数日が過ぎていった。ところが、仕事から帰ってくると、父親は青白い顔をして、息子を庭の方に呼び出した。

「おまえの嫁は、鶏の化身だぞ。血液検査に出したら人間のものではないという結果が出たんだ」

人間ロケット

世界初の有人ロケットが、まさに発射されようとしていた。内部は乗員一人のスペースしかなく、宇宙を舞台にした軍拡の先鞭せんべんをつけるべく志願した軍人が搭乗とうじょうしていた。結婚したばかりの妻は泣いて止めたが、必ず帰還するからと言い聞かせた。轟音ごうおんとともにロケットは青空を突き抜け、大気が存在しない宇宙空間に到達した。星々とともに暗闇の中に輝く太陽を認めた。地球を周回する軌道に入りかけたとき、異常を知らせるサイレンが鳴り出した。妻の暮らす町は、すでに夜の闇に沈んでいた。

胸騒むなさわぎがした妻は、寢床から飛び出すと、ガウンを羽織はおって

屋外に出た。流れ星に見えた光は、火球かきゅうとなつて燃え上がった。
夫は闇を照らして帰還したのだと思つた。

バーチャル・コンサート

生前に録画されたコンサートをもとに、ミュージシャンの演奏をバーチャルで再現する試みがなされた。当時の白黒映像をカラー化し、コンピュータで立体映像に変換した上で、音声もサラウンド化し、実際のスタジオの上にホログラムで映写したのである。

限界に達するまで突き詰めて、旋回せんかいしながら高みを目指すジョン・コルトレーンのサククスに、エリック・ドルフィーの超絶したフルートの音空間がコントラストを成なしていた。まるで死んだコルトレーンがよみがえり、意志を持つてサククスを吹いている気がした。

演奏が終わった瞬間、バーチャルと現実の拍手が一つになった。僕は我を忘れて舞台に駆け上がり、コルトレーンの手を握ろうとしたが……

迫真の演技

詩人のマラルメは、喉の奥が痙攣し、危うく窒息しそうになった。発作が治まったので、万一に備えて遺書をしたため、翌日医師に往診してもらった。命拾いしたことを話すうちに、マラルメは有頂天になっていた。

「こんな具合ですよ。舌がもつれて喉の奥に詰まって……」

前日の午後の出来事を再現しようとした。次の瞬間、舌が痺れて動かないのに気づいた。台詞と演技が真に迫って、断末魔の苦しみが再来したのである。遠ざかる意識の中で、「花」と呟くと、幻の花が浮かび上がった。詩の言葉は想像力にしか働きかけなかったため、演技を伴った言葉が生死を左右するなど、

思いも寄らなかつたのだ。花はいたわるように微笑むと、死の香りを奏^{かな}でた。

汝、姦淫するなかれ

夫が不在の間に、大学生が勝手に部屋に上がりこんできた。しまいには、にじり寄って口説き始めた。

「キリストは。パリサイ人に反対して、淫^{みだ}らな目で女を見ること自体、姦淫^{かんいん}するのと同じだと述べてますが、キリストは自己の思いがすべて実現してしまうのを知っていて、ことさら魂の清純さを弟子たちに強^しいたんだと思うんです」

そう言って、学生は人妻の手を握ろうとした。女はとつさに手を引つ込め、男の視線を避けながら言った。

「でも、あなたのような凡人にそんな能力あるのかしら？」

「これは誰もが気づかずに持っている隠れた能力です。奥さん

だって僕の思いのままですよ」

女は急に学生を睨みつけた。

「穢^{けが}らわしい男め、さつさと消え失^うせろ！」

二酸化炭素排出ゼロ

「私は歴史に名前を残したいのよ。二千五十年までに東京の二酸化炭素排出量をゼロにする目標立てたから、達成する方法教えてちょうだい」

「そのためには、まず、すべての工場や企業を移転させる必要があります。次に、住民を転出させなければなりません。千三百万人が排出する二酸化炭素の量は膨大なものですから」

「人間がいなくなれば、さぞかし空気がきれいになるでしょうね」

「さらに、鳥や魚も二酸化炭素を排出するので、死滅させなければなりません。樹木だって、光合成しない時は排出してま

から」

「どんな光景か見てみたいわ。でも、私がいたら二酸化炭素排出してしまうわね」

「大丈夫です。その頃は私たちもお墓の中ですから」

女色即是空

仏弟子である舍利弗しゃりほつは、修行の妨げになるからと言って、道行く女人からも目をそらしていた。これを見た維摩居士ゆいまこじは、避けようとこだわること自体迷いであると説いた。舍利弗が頑かたくななのを見て、維摩は天女てんにょに幻術げんじゆつを使うように頼み、舍利弗の体を女体に変えてしまった。

舍利弗は道行くたびに男から声をかけられ戸惑ったが、水面に映っている姿が天女であるのに度肝どぎもを抜かれた。

やがて、美しい衣を着けて化粧した自分が好きになった。流し目を使って男を誘おうとした途端、幻術が解けて坊主頭と袈け裟さの姿に戻ってしまった。相手が悲鳴を上げて逃げ出し、赤面

している舍利弗のもとに、維摩は現れると諭した。
「汝、女色も空なりと悟ったか」

猫産んじやった

年の離れた妻も、ようやく子宝を授かったらしい。日に日にお腹が大きくなり、ついに臨月が訪れた。早めに入院させようとしたが、妻は家事をしていた方がお産が軽いと言ってきた。
い。

その日の夕方、俺が仕事から戻ってくると、妻の傍らに一匹の子猫が眠っていた。不審に思つて、寢床の妻に問いかけてみた。

「私たちの赤ちゃんよ」と妻は答えて、慈愛に満ちた目で眺めている。もしや妻は、浮気していたのではないか。初老の夫を袖にして、近所の猫とつるんだというわけか。待てよ、ま

さか俺が猫のはずはないよな。

「実は私、流産してしまったの。泣いていたら、産婦人科医院の息子さんが、生まれたばかりの子猫を連れてきてくださったの」

猫は鎧

無造作に雨戸を開けたせいで、可愛がっていた猫が逃げてしまった。

「どうして猫がいるのに気をつけなかったんだ！」

「私だってお母さんの世話が忙しいのよ！」

妹は車椅子に母を乗せて、居間の方に連れてきた。妹がいらいらしていると、母は妹の肩の辺りを思いつきりつねった。

「何すんの、お母さん、そこ、私かけがしてるところなのよ……」

顔を押さえると、泣きそうな声で流しの方に駆けていった。当の母の方は、自分が何をしたかも忘れてしまったらしい。

「わたし、なにかしたのかしら」と澄まし顔。

「それはね、いじわるばあさんって言うんだよ」

けさ起きた一部始終を話すと、友人はぼつりと言った。

「猫がいなくなった途端に家庭崩壊だね」

※「猫は銚^{かすがい}」は「子は銚」をもじったもの。銚は戸のかけがねや、つなぎ止めておくものを表す。

バイオテクノロジーによる男性妊娠の効用に関する考察

本日は男性を妊娠^{にんしん}させる効用について、お話しようと思います。従来^{じゅうらい}、人間という種においては、女性が妊娠の役目を担^{にな}ってきました。美しい母親を持つ男性は、伴侶とすべき女性の容姿^{ようし}に対する要求の基準が高く、かえって子孫を残す機会に恵まれない傾向にあり、ゆえに美形の遺伝子は絶滅の危機^{ひん}に瀕^{ひん}してきたのであります。

遺伝子操作^{そくさく}により男性が妊娠可能となった現在、美しい女性^{にんせい}は妊娠の負担を強いられることなく、卵子を複数の男性に産みつけることができるようになりました。

これによって俄然^{がぜん}、美形の遺伝子が栄え、日本人の容貌^{いさじろ}は著

しく改善されてきたのであります。一方で、美女の誘惑により未婚の父親が増えるという社会問題も生じました。

八幡神の還俗

応神天皇は生前『論語』『千字文』などの漢籍を愛され、国内の平定と土木治水に御心を悩ませ給うた。幽界にお隠れになつて後、仏道修行に勤しまれ、八幡大菩薩の名で崇め奉られた。

豊前の宇佐、京の石清水と祀られて後、源頼朝が鶴岡八幡宮寺を建立してからは、一年の多くを鎌倉でお過ごしになり、弓馬の神としても崇められるようになった。

ところが、元号が明治と改められるや、神官にそのかされた暴徒が八幡宮寺を襲撃し、大塔や護摩堂、仁王門などを破壊し尽くした。長年の修行の道場を壊され、還俗を強いられたこ

とにいたく心を痛められた。

「この国は利^リ他^たの精神を失い、異国を餌^え食^{じき}とすることで、やがては亡国の危機に立たされるであろう」

憑依

体の不調が続いた私は、毎晩夢を見るようになりました。遠い昔の物語で、村は火をかけられました。敵兵は矢を放ち、仲間^間は次々に殺されていくのです。

「たぶん、私は取り憑^つかれてしまったんです」

上^{しょうにん}人は護^ご摩^まを焚^きいて祈^き禱^{とう}を始めました。その途端、肉体の中で壮絶な戦いが始まりました。私は自分が助けてもらおうとしているのか、追い立てられようとしているのか分からなくなりました、敵に対する怒りを掻^かき立てられ、私は大声で怒鳴っているのです。暗闇に閃^{せん}光^{こう}が走り、雷鳴が轟^{とどろ}きました。

「おまえは助けられたいのか、取り殺されたいのか、どちらじ

や！」

上人の一喝いっかつに私も渾身こんしんの祈りを捧げた瞬間、怒りの塊はようやく体から抜けていきました。

※憑依ひょういとは死者の霊が肉体に取り憑くこと。

ぴんぴんころり

バブル崩壊の前夜だった。男はブランド物のスーツで決め、カクテルを飲みながら、ディスコで女と踊っていた。男の口癖は、日本スゲえだった。財布の札束を見せびらかし、世界第二の経済大国に誇りを感じていた。

酔いが覚めると、服が湿っていた。卒塔婆そとうばが風で揺れている。鴉からすが無気味な声で鳴いた。握っていたのは人骨だった。墓場で酔い潰れていたのだ。ここから逃げ出さなければ。こんな国じゃ生きていけない。そうだ、外国に行こう。俺はまだ若いんだし。

ところが、それも夢の続きだった。八十過ぎの痩せやこけた老

人が、アパートの一室で、瀕死ひんしの状態で発見された。「ぴんぴんころり、ぴんころり、年金もらえず、ころり逝ゆく」と口ずさんでいた。

奉行と畳屋

打ちこわしに加わって御用となった畳屋は、首謀者に仕立て上げられて死罪となった。閻魔えんま庁にたどり着く頃、背後に自分を死罪にした奉行ぶぎょうが立っていた。急死した奉行は、自分の方が先に裁きさばを受けると言い張った。

「拙者せっしゃは間違まちがって地獄じごくに墮おちた者でござる」

奉行は生前、天下てんか万民ばんみんのためと言いながら、罪のない者を拷問ごうもんで死なせてきた。閻魔大王は激怒して、奉行の舌を鬼に切らせた。ところが、申し開きするたびに新しい舌が生えてきて、舌を切られる苦痛さいなに苛いらまれ続けた。

畳屋は引き出された時、地藏菩薩じぞうぼさつに救いを求めた。

「おまえはもはや存在しない。存在しない者に苦しみはない」
言葉を理解した途端、まばゆい光で畳屋は地獄もろとも消滅した。

不連続ドラマ

「視聴者の皆様から、奇抜な展開についていけないという意見が寄せられています」

「そもそも、芸術には驚異を与え、常識を覆すという機能がありまして、視聴者を当惑させるということとは……」

「しかし、いきなり結果が現れて、その過程が描かれていなかったら、視聴者も納得できないのではないのでしょうか」

「あなた何様？ 私のドラマがどれだけ視聴率を誇つてると思つてるの？」

「それは人気俳優が演じてるからです。本だったら、途中で投げ出してます。理解不能なドラマに付き合わされたら、見終

わった後の脱力感は半端ないのでは……」
「ひどい（泣）。これ生放送なんですよ。おまえなんか二度とテレビに出られないようにさせてやる！」

不連続ドラマ（続）

「人気ドラマを作るコツを教えてくださいませんか」
「まず、視聴者の多くは女性だから、イケメン俳優に演技させることが一番大切な。次に、女性が喜びそうなラブシーン、視聴者をハラハラさせる場面を、その日の最後に持つてくるの。初めからストーリー作ってしまうと、私もつまらないから、何を書くかは事前に決めておかない。たとえ矛盾することが出てきても、勢いに任せて書き続けなさい。慣れれば、自動筆記で書けるようになるわ」

（要するに、行き当たりばったりというわけか）
「それがシュールな世界を作り上げるコツね」

（現実感のない絵空事ってことか）

「とても、貴重なお話、有り難うございます。反面教師にさせていただきます」

ヘーゲルの最期

一八三一年、ベルリンでヘーゲルはコレラに感染し、臨終の時を迎えようとしていた。医師が問いかけても反応はなかったが、哲学者の意識は脳に閉じ込められながらも、「人間は自発的に死ななければ自由ではあり得ない」という命題について問い続けていた。

私は疫病に罹患して死ぬわけにはいかない。それは動物的な死である。むしろ、臨終においても自ら命を絶つことで、死に勝利し自己を完成するのだ……。

すでにヘーゲルの心臓は停止していたが、思索は途切れず続いていた。看取った医師は死に顔を見つめ、看護婦にこう洩ら

した。

「しばらくは意識が残っていても、問いの答えを得ることはないだろう。謎を問いつけてこそ哲学者と言えるからだ」

ホログラフィックな知性体

ホログラフィー技術の進化にともない、仮想現実の立体像に人工知能を埋め込むことに成功したらしい。私が取材に出向くと、ホログラムで作られた知性体が、レストランのテーブルの前に座っていた。立体像はよほど精巧に作られているのか、エスプリの効いた話で会場を沸かしたばかりか、かなりのグルメで大酒飲みだった。

しかし、いくら精巧にできているとはいえ、立体像が飲み食いするだろうか。食べた物が床に散乱しているわけでもない。果たして、私はいっぱい担がれていたのか？

実は、目の前にいたのは、単なる大食漢に過ぎなかったそ

うだ。ホログラフィックな知性体というのは私のことで、その日取材されていたのは、私の方だったのだ。

孫からのメール

僕は最近、孫と称する青年からメールを受け取った。

「人生にはほとほと愛想が尽きました。つきましては、自殺する前におじいさまのお命頂戴ちやうだいつかまつ仕りたく云々うんぬん」とある。

若者は奇想を費とうとぶ余り、大胆不敵な行動に走るものだ。自身の存在を消すために、生まれる前に亡くなっていた祖父である僕を、未来から殺しに来るというのである。

何で半世紀後に生まれる孫に、命を狙ねらわれなければならぬ？ とはいっても、弟ぐらいの年のようだから、会ったら案外、話が合うかもしれない。

とは思ったのだが、歩むはずの残りの人生を、むざむざ失う

のも忍びない。そこで、精管^{せいかん}を切除する手術を受けてしまった。それ以来、孫だという青年からメールは届かなくなった。

マトリョーシカと呼ばれた男

演説中の与党議員が群衆に取り囲まれ、もみくちゃにされた。その際、男性のぬいぐるみのはがされて、中から首相^{しゅしやう}そつくりの人間が出てきた。ゆるキャラがぬいぐるみを着ているのは、小学生でも知っているが、スーツ姿の政治家のぬいぐるみがあるって、中から首相の分身が出てきたことに、現場を目撃した群衆は啞然^{あぜん}とした。なるほど、自分の意見がないのは、中に別な人間が入っていたからだった。

「こいつはマトリョーシカだ！」

活動家の一人が腕をつかむと、首相のぬいぐるみも破れて、さらに中からA国の大統領が出てきた。首相が国民の幸福をな

いがしろにして、他国の便宜ばかり図っていたのも、中に大統領の分身が入っていたからだった。

夢遊病の夢

ある夜、僕は改築前の部屋で寝ていることに気づいた。これは夢に違いないのだが、机や本棚、障子の配置まで当時のままなのに驚いた。調子に乗って廊下に出てみることにした。ただ、実際には二階のベッドで寝ているはずなので、目に見える廊下と、現実には存在する廊下の位置を考慮して、階段から転げ落ちずに歩くのには勇気が要った。

ダイニングキッチンに入ると、正面にかつてのトイレが見えた。ドアを開けると便器が下にある。ただし、これは現実のトイレではないはずだ。興味本位で小便をしたら、あとで大変だとは思ったが、好奇心に負けてしまった。

その後、どんな騒ぎになったかつて？ 何のことはない。そこは僕のベッドの中だったからである。

もう一つの地球

人は老いるにつれ、記憶を失い赤子^{あかご}に帰っていく。だが、言うことが頓珍漢^{とんちんかん}な母も、人としての感情は持っている。震災のニュースを見ているうちに、表情が悲痛なものに変わっていった。

「このまま地球がなくなってしまうたらどうするの」と嘆き、「地球はいくつつあるの？」と問うてきた。

「地球みたいな星はいくつもあるよ。いつか消えてしまってもね」

人間はいずれ生を終えるわけだが、生命が宇宙の中で存続するかどうか、母にとっては、お茶菓子よりも重要なものにな

っていた。それが死を乗り越えるための切り札^{ふだ}だからだ。なだめようとしていると、母は真剣な顔つきになって、食ってかかってきた。

「人類が出来るまでに時間がかかるんだから！」

もう一人のお前

俺はもう一人のお前だ。お前が子供の頃も、結婚して女房といがみ合い、妻子を捨てて一人で生きる道選んだのだって知ってる。お前はいつも孤独をかこっていたが、俺はお前の体の中でじっと身を縮め、お前の体液すりながら生きてきたんだ。人として生まれることなく、自分が生きるはずだった人生を夢見ながら、お前が命尽きる日まで付き合ってやろうって思ったのさ。

それなのに、お前は俺の存在に気づくなり、自身の腹をメスで切らせて、俺を中から引き出しやがった。俺が呪い^{のろ}の言葉を放って腕を伸ばしたのを、お前に見せてやりたかったよ。俺は

ホルマリン漬けにされて、医者の見世物にされるだろう。でも、このままで済むってわけじゃないぜ……

桃太郎生まれず

むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。その二人を密告した者がおりました。おじいさんはこくし国司の林で薪たきぎを取った罪で、おばあさんは流れてきた桃を勝手に持ち帰った罪でけび検非違使いしに捕らえられ、ともに獄死してしまいました。押収された桃も、何者かが食べてしまいました。

その頃、都では人に化けた鬼が重税を課して、民を苦しめておりました。本来なら桃太郎が生まれて、鬼どもを退治するはずだったのですが、国の乱れは治まることなく、いつになつたら正義がもたらされるのかと、帝は御心みこころを悩ませ給うのでし

た。めでたくなし、めでたくなし。

モンゴルの少年

大草原に少年の家族は住んでいた。隣のゲルまで数キロ離れていたから、少年の遊び相手は犬と家畜の羊だった。

ある時、隣人が馬に乗ってやってきた。少年は犬を動けなくするため、石につないだ。犬は石を引きずったまま走り回った。おみやげは捕らえたばかりの小鳥だった。お客が帰ると、少年はお父さんと一緒に小鳥を逃がした。

次の日、少年は羊に石をつないでみた。羊ものろのろと石を引きずって歩いた。蛙にも小石をつないだのだが、すっかり忘れて眠ってしまった。

翌朝、少年はゲルの中で石につながれていた。おじいさんは、

干からびた蛙の死体を見せて言った。

「お前がどんなことをしたか分かったか」

少年は命の大切さに気づいて涙を流した。

※ゲルとは遊牧民の移動式住居のこと。

与那国島の人升田

琉球^{りゅうきゅう}の西端^{せいたん}、与那国島^{よなぐにじま}の村で真夜中、銅鑼^{どら}と法螺貝^{ほらがい}がけたたましく鳴り渡った。杖^{つえ}を突かなければ歩けなかった父親^{とうふち}は人升田^{とうんぐだ}に入らず、息子の前で若い衆に棍棒^{こんぼう}で殴りつけられ血まみれになった。瀕死^{ひんし}の父に息子がすがりつくと、父親は虫の息で遺言を残した。

「与那国は女王^{じようおう}に治められた平和な島だった。そこに琉球王府^{りゅうきゅうおうふ}が攻め入ってきた。今度は琉球に薩摩^{さつま}が侵攻してきたが、上前^{うわまえ}をはねる薩摩のために、王府はこの島に人頭税^{じんとうぜい}を課したのだ。弱い者がさらに弱い者を虐^{しい}げて、被害者面^{ひがいしやめん}しているのさ。人滅^{ひとく}らししなけりや年貢が払えぬ。これは島の掟^{おきて}だから、村の衆

を恨むでないぞ。しかし、こんな不正にあぐらかく王府は、い
ずれヤマトに攻め滅ぼされようぞ」

理想の相手と出会えます

結婚したくてもできない草食男子の皆さん、朗報ろうほうです。理想
の相手と出会えます。さびしい夜すがたみとおさらばです。しかもお
金がかかりません。必要なのは姿見一枚だけです。

まず、裸になつて鏡に自分の像を写したら、女性のイメージ
に変容させていきます。スタイルや容貌ようぼうは、お好みのタイプに
しましょう。胸の大きな、色っぽい女の子がいいですね。女性
の下着を身につければ、イメージしやすいかもしれません。女性
行を続けている間は、禁欲を保ってください。靈氣きようけつを凝結ぎやうけつさ
せられれば、理想の女性が夢の中に訪れるようになります。た
だし、子供は作れませんので悪あしからず。

もし誤って自分が女性化した場合は、ドレスを着て理想の男性を射止めましょう。

冷泉帝の懊悩

六条院ろくじょういんの光源氏ひかるげんじのもとに、冷泉帝れいぜいていがお出ましになった。帝みかどは深刻な面持ちおもで、いきなり譲位やんぎしたいと仰せになった。

「私は聞いてはならぬことを、夜居よいの僧から聞いてしまったのです。私は桐壺きりつぼの帝の皇子おうじではなく、六条院の子だということです」

「それは事実かもしれません。見たことがない母への思慕しぼが募つる余り、藤壺ふじつぼの中宮ちゅうぐうと許されぬ関係を結んでしまったのです。しかし、譲位したいなどとは仰せにならないで下さい。たとえ臣籍しんせきに下った私の血を受けていたとしても、三種の神器じんぎをもつて即位されたからには、帝として君臨くんりんされているのです。帝が凜りん

とした姿で御簾みすの向こうにお立ちになれば、臣下は謹つつしんで敬うやまい申し上げ、国の安寧あんねいは保たれるのです」

老子再誕

周の国に生まれた老子は、入滅にゆうめつした後も生死を繰り返し、衆生救済のために將軍が支配する独裁国に転生した。この国では人は棺桶かんおけから老いさらばえた姿で誕生し、知性は幼児のまま、若い姿の大人やあどけない顔した高齢者を支配していた。時の流れとともに賢さを増す住民は、肉体ばかりが若返っていき、赤子の姿で晩年を過ごすのだった。

老子は幼い頃の自分を思い起こさせる高齢者に共感し、生まれて間もない皺しわだらけの將軍が、虫を殺すように住民を虐しいたげているのに心を痛めた。

そこで、將軍に拝謁はいえつして知性が増す仙薬せんやくを献じた。案の定じよう、

將軍は一気に飲み干してしまい、見る見る若返ってその日のうちに、母親の胎内^{たいたい}に呑み込まれてしまった。

ロボットがあふれる

「世界中がロボットに占領されています」

テレビを見たロボットは、アナウンサーの発言に耳を疑った。いくらコンピュータ技術が発達しても、人間の頭脳を超すような機能を持つロボットの出現は疑問視されていたからだ。ニュースを見たロボット自身も、それはよく知っていた。

信じられないまま町に出ると、駅前はスマートフォンを片手に、夢遊病のように歩き回る若者であふれていた。彼らの目は小さな画面に釘付け^{くぎづけ}で、中に現れた怪物を捕まえることに夢中になり、車と衝突したり、下水^{げすい}に転落したりしていた。人間としての判断力はすっかり失われていた。

「なるほど、これならゲームをしないロボットが、人間どもに君臨する社会も夢ではないな」

私は誰（我是誰）？

中国のある町で、老女が道に倒れていた。

青年が老女を助け起こしたが、足首をひねったのか、引きずるように歩いている。ところが、周囲に人が集まってきたのを見るなり、老女の態度は一変した。

「私はこの男に突き飛ばされたのに、知らぬ振りして行こうとしてるんですよ」

老女は青年のシャツをつかんで放そうとしない。男たちが走り寄ってきて、青年に詰め寄った。

「医療費払ってもらうからね」

「何言っている。倒れてたから助けようとしたままだろ」

男たちは嘘つけ、公安に引き渡せと騒いでいる。

「何を言う。僕は警官だ」

青年はポケットから警察手帳を取り出した。

「非番だったんだ。婆さん、正直に名前を言いなさい」

「私は誰だったかいの？」